

本庶佑（京都大学がん免疫総合研究センター長） 私の履歴書（1） 幸運な人生

2018年10月1日夕、研究室にある私の部屋で数人のスタッフと論文の校正作業をしていた。午後5時ごろだったと思う。普段、論文校正の最中には電話を取り次がないようにと云ってあるが、この時だけは秘書がルールを破って飛び込んできた。



最近の筆者

「先生、でていただかないと困ります」。ノーベル生理学・医学賞を選考するスウェーデンのカロリンスカ研究所からの電話だった。「（ノーベル賞を）受けますか」との問いかけに「もちろん」と答え、そして「念のためメールも送ってほしい」と伝えた。悪戯（いたずら）かもしれない。以降、いまだかつてなかった多忙な日々が半年以上も続いた。

ノーベル賞をとるにはどうすればいいか？ よくそんな質問をされる。秘訣やコツなどもちろんない。物理学、化学含め自然科学系で毎年最大9人選ばれるが、それでもたった9人だ。賞に値する研究を成し遂げても確実に受賞できるものでもない。ノーベル賞はノーベルショー（Show）だと思う。

振り返ると、60年に及ぶ研究人生は幸運に恵まれていた。基礎医学へと進んだ学生時代に生化学者の早石修氏と西塚泰美氏に出会い、師事した。1970年代の学生運動の影響で研究が滞り、米国へ飛び出した。そこで生涯の師となるカーネギー研究所のブラウン博士、米国立衛生研究所（NIH）のレーダー博士の指導を受けることができた。

「がん治療に革命をもたらした」と授賞時に評された免疫チェックポイント療法。そのきっかけとなるPD-1分子の発見も、研究室にやってきたばかりの若手研究者の熱意から始まったものだ。当初はがんの画期的な治療につながるとは思ってなかった。

DNAの二重らせん構造の発見によって、生物学、生命科学は1970年代以降、ドラスチックに進展する。かつてブラックボックスだった生命の正体に遺伝情報から迫れるようになったのだ。

生化学から分子生物学、免疫学へ。思えば、科学者として常に目指してきたのは「生命の謎解き」だった。この未知の世界は新たな知見が得られれば、また、新たな疑問が生まれてくる。旺盛な好奇心が満たされることはない。

私はいま、車椅子生活を強いられている。22年2月22日、京都市内の府道交差点で自ら運転していた車がバスと衝突する事故を起こした。頸椎の損傷でどうやら神経を覆っている膜が破れたようだ。事故後気がつくと、左手と左足が動かなかった。

この2年半、リハビリに励んできた。筑波大学教授の山海嘉之氏が手がけたロボットスーツ「HAL」を使って歩行訓練をしている。

これがやたらと疲れる。肉体的な疲労ではなく、とにかく脳が疲れるのだ。かつて経験をしたことのないような疲労感。足を動かす際に末梢（まっしょう）神経からやってくる電気信号の膨大な情報を処理し、新しい経路形成に脳が追われているのだろう。

歩くということがどういうことなのか。病気になってはじめて健康のありがたさを知るように、大きなけがをして改めて、生命、人体の不思議の奥深さに気づかされた。

左足の筋力は徐々に向上してきている。左手の先の方もだいぶ動くようになった。次は「HAL」で肩を動かす訓練も始める。

この11月、念願だったがん免疫総合研究センター棟がオープンする。開所式までには少しでも歩けるようになりたい。いや、歩いてみせる。